

戦争に翻弄されてきた沖縄の
近現代史をみつめ、人々の尊厳を伝える

沖縄

映画『日本国憲法』の
ジャン・ユンカーマン監督作品

うりずんの雨

ドキュメンタリー映画 2時間28分/カラー/ ©2015SIGLO

2015年 第89回キネマ旬報 文化映画ベスト・テン 第1位
2015年(第70回)毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞 受賞
2015年度 日本映画ペンクラブ賞 受賞(シグロ)



「うりずん」とは、潤い初め(うるおいぞめ)が語源とされ、冬が終わって大地が潤い、草木が芽吹く3月頃から、沖縄が梅雨に入る5月ぐらいまでをさす言葉。沖縄地上戦がうりずんの季節に重なり、戦後70年たった現在もこの時期になると当時の記憶が甦り、体調を崩す人たちがいる。

うりずんの雨は血の雨
礎の魂

涙雨
呼び起こす雨



2016 7/30 (土)

せんだいメディアテーク7Fスタジオシアター

①10:00 ②13:30 ③17:30

参加費 一般 前売り1,000円 当日1,300円

学生 500円 当日も同じ・中学生以下無料

前売り券 メディアテーク1F museumshop6

☆電話でのご予約は → 022-248-2866 春日 090-7936-3437 須藤

主催 「テロにも戦争にもNOを！」の会

この世界に、沖縄ほど過酷な第二次世界大戦の遺産はない。
そして、平和と平等を求めるどんな声も、沖縄の人々が語る言葉ほど雄弁ではない。

映画『沖縄 うりずんの雨』を観ると、そんな思いにさせられる。
この映画は、沖縄の人々に寄り添いながら、けっして抑制を失わず、私たちの心をしっかりとつかむ。
そして1945年の沖縄戦から米軍による植民地化、現代の闘争まで導いていく。

日米間の戦争の悲惨さや冷戦時代のアメリカによる権力の乱用、
そして戦後も続いた東京の政治家たちの背信…。
これらを証言するのは沖縄の人々だけではない。アメリカ人たちも率直な言葉で語る。
さまざまな視点から捉えた映像のなかには、戦場でアメリカ軍が撮影した、引き込まれるような
記録映像もある。

この映画を観ることで、私たちは、沖縄の人が体験してきた抑圧と差別の歴史を直視させられること
になる。
それでもなお、彼らが語る言葉は明快で、威厳に満ちているため、
観る者に理解や賞賛だけでなく、希望すら抱かせる。
この映画の最も素晴らしいところである。

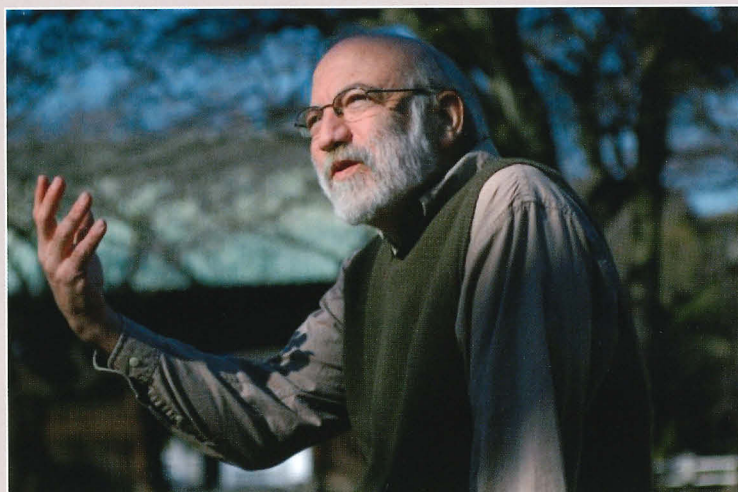
ジョン・ダワー(歴史家)

映画 パンフレットより

ジャン・ユンカーマン監督 人と作品

1952年、アメリカミルウォーキー生れ。
横須賀基地の軍医であった父の仕事の関係で生後3ヶ月の時に初来日。一年間ほど家族と葉山に暮らす。
1969年、慶應義塾志木高等学校に留学。スタンフォード大学東洋文学語科卒業。卒業後の1975年に沖縄に渡り、ゴザのバー街で反戦兵士の支援活動に関わる。
1982年から日産自動車における「日本的」労務関係を取材し、そのドキュメンタリーをテレビ局で放送したことがきっかけで映画の世界の道を拓く。
画家の丸木位里、俊夫夫妻を取材した「劫火—ヒロシマからの旅—」(86年)は米国アカデミー賞記録映画部門ノミネート、9.11のテロ後に言語学者ノーム・チョムスキーにインタビューした『チョムスキー—9.11』(02年)は数ヶ国語に翻訳され、世界各国で劇場公開された。世界の知識人12人へのインタビューをもとに日本国憲法を検証する映画『日本国憲法』(05年)は戦後60年の節目に日本国憲法の意義を改めて問いかけた。
現在も日米両国を拠点に活動を続けている。

「テロにも戦争にもNOを！」の会では05年に映画『日本国憲法』を上映、続く06年3月に監督の講演会を開催。その講演記録をブックレット発行した。



- | | |
|-------|---------------------------|
| 1986年 | 『HELLFIRE : 劫火—ヒロシマからの旅—』 |
| 1990年 | 『老人と海』 |
| 2002年 | 『チョムスキー9.11』 |
| 2003年 | 『ノームチョムスキー—イラク後の世界を語る—』 |
| 2005年 | 『映画 日本国憲法』 |